

グローバリゼーション論争の「第四局面」に向けて

—グローバリゼーション研究の現状と方法をめぐる一考察—

妹尾裕彦

はじめに

ときに「Buzzwordバズワード」と揶揄されつつも、「グローバリゼーション」が時代を象徴するキーワードとなって久しい。グローバリゼーションについての議論は人文・社会科学の各領域(社会学、カルチュラル・スタディーズ、人類学、政治学、国際関係論、経済学など)を横断する形で積み上げられており、いまやGlobalization Studies(グローバリゼーション研究、以下GSと略)なるものが生成しつつあると言っても過言ではない。また最近になって、GSの論文集とも呼ぶべきRobertson and White [2003]が刊行され、一層の研究の進展が望まれている。

このGSは、主に2つの領域において展開されている。それは第一に、経済的活動のグローバル化や、それによって国民国家の主権や領域性などがどのように変容しているのかを、主に政治学や国際関係論、経済学の立場から論じるもの(「政治経済学的グローバリゼーション論」)であり、第二にメディアや文化のグローバル化などによって近代社会がどのように変容しているのかを、主に社会学的な観点から論じるもの(「社会学的グローバリゼーション論」。但しカルチュラル・スタディーズや人類学を含む)である。こうしたGSの現状を踏まえた伊豫谷は、GSの大きな課題が、この両者をどのように接続するかであると指摘した(伊豫谷(他)[1999:60])。

ところが6巻本として計125の論文を収録したRobertson and White [2003]では、グローバリゼ

ーションにおいて最も中心的な位置を占めている(としばしば思われている)経済のグローバル化を正面から取り上げた論文が、ごく僅かしか収録されていない¹⁾。これはなぜなのだろうか。

一つの理由として考えられるのは、そもそも編者達が経済のグローバル化に関する論文を収録する気がなかった、というものである。なるほど確かに同書のタイトルは*Globalization: Critical Concepts in Sociology*となっている。このことから、「同書は単に社会学的グローバリゼーション論の論文を収録しただけではないか」と考える向きもあるだろう。しかしこの考え方は、基本的に間違っている。なぜなら同書においては、社会学の範疇には含めがたい論文、すなわち国際関係や人権に関する論文が、多数、収録されているからである。

もちろん、編者達の好みや能力的制約から、経済のグローバル化に関する論文が収録されなかっただけではないか、と考えることも可能ではある。しかし究極的には、経済のグローバル化に関する論文がごく僅かしか収録されなかった理由は、別のところにあるのではなからうか。おそらく編者達は、経済のグローバル化に関する論文を収録する気がなかったのではなく、収録しようにもそれに値する論文があまり存在しなかったのではなからうか。もう少し踏み込んで言えば、経済のグローバル化に関する論文は、GSの到達水準から見て不十分ないしは不適切なものが大半であり、学としてのGSに貢献し

ないばかりか、グローバリゼーションを的確に捉え損なってすらいのではなかろうか。

そこで本稿は、グローバリゼーション論争を類型化した先行研究を踏まえて、まず①「経済のグローバル化に関する論文が、GSの到達水準から見て不十分ないしは不適切なものが大半であり、学としてのGSに貢献しない」とは具体的にどのようなことなのかを明らかにした上で、次に②経済のグローバル化に関する研究が(再び)GSに貢献するようになるためには、どのような観点からの研究が求められているのか、を指摘する。さらにこの作業を通じて、③GSの先行研究におけるグローバリゼーション論争の類型化は、実際には欠陥を抱えているがゆえに、本来GSとして問わなければならないある種の〈問い〉が見過ごされてしまっていることを指摘したうえで、時間-空間の変容という問題編制を経由することによって、その〈問い〉を浮かび上がらせる。そして最終的には、この〈問い〉がグローバル・エコノミーに対していかなる帰結をもたらすのかを検討すべきであることに言及する。以上が本稿の目的である。

I. GSの現在

上で提示した課題に答えを出すためには、まずGSの全体的な見取り図を描いておく必要があるだろう。グローバリゼーション論争が類型化されうることは、ヘルドやマグリュウらの論考によって明らかにされているが(Held et al. [1999], Held (ed.) [2000], McGrew [1998]など)、これを改めて簡単に確認しておく、以下のようになる。

①「グローバル主義者」：1970年代以降とりわけ1990年代以降に世界経済の結合性・一体性・相互依存性が強まってきたという判断から、グローバリゼーションを歴史的に前例のないプロセスないしは現象とみなす立場。市場のパワーが国家のパワーに取って代わったと見な

している。また経済的・文化的に、世界規模での均質化・画一化が進展していると見なしている。価値評価としては、肯定的なもの(ネオ・リベラリズム的)と否定的なもの(ネオ・マルクス主義的)が入り乱れている。

②「伝統主義者」(或いは「懐疑主義者」)：そもそもグローバリゼーションなるものが本当に存在しているのか、あるいは存在しているとしてそれが歴史的に前例のないものなのかどうかなどを問う立場。国家は市場のパワーに屈することなく依然として健在であると思なしている。

③「変容論者」：(a)グローバリゼーションによって国家が市場に完全に屈服したわけでもなければ、全く揺るぎないわけでもなく、その力や機能や範囲は強化されている側面と弱体化している側面があり、その具体的な変容を検討しなければならない、(b)同様に、一見すると均質な文化が世界中に広がっているように見えるが、実際にはそこに必ずローカル性が付与される。それどころか、ローカルな生活習慣や生活様式が、グローバル化の影響を受けて再活性化することもある、(c)結局のところ、グローバリゼーションとは一方向的なプロセスないしは現象ではなく、双方向的な作用や反作用をも伴った複雑かつ多元的で矛盾を抱えた長期に渡る歴史的なプロセスないしは現象であり、現代社会と世界秩序を再形成する力である。したがって経済的な動き(市場の世界化)からだけではなく、文化や社会などさまざまな領域から多次元的に解釈されなければならない、という立場である。

そして日本では、ヘルドやマグリュウらによるこの類型化を受けた原田[2001]が、グローバル主義者のなかでグローバリゼーションに対する価値評価が大きく分かれていることを重視し、これを「グローバリスト」と「反グローバリスト」に細分割することを提唱した。したが

ってわれわれは、グローバリゼーション論を以下のように類型化できるだろう。

- ①グローバリスト
- ②反グローバリスト
- ③非グローバリスト(「伝統主義者」と同義)
- ④変容論者

もちろんこのような類型化は、多様な論者の各見解の骨子をいささか強引に区分したに過ぎないが、それでも錯綜したグローバリゼーション論争の見通しをかなり改善したことは間違いない。しかし冒頭の問いに対する回答は、むしろこれらの各見解がどのような対立軸によって規定されているのかを、以下のように段階論的に把握することによってもたらされるだろう。

その一。グローバリゼーションに対して互いに異なる評価を下すグローバリストと反グローバリストの対立は、グローバリゼーション論争の「第一局面」と定位できる。この第一局面の対立軸は、「賛成／反対」である。しかし両者は表面的な相違にも関わらず、「市場の力がいまや国家以上に強力になっている」「国家主権が失われる傾向にある」「世界の諸文化が均質化している」といった現状認識を共有している。この認識を支えているのはグローバリゼーションが現実存在している、という判断である。したがって彼らは「グローバリゼーション存在論者」と一括しうる。

その二。グローバリゼーション存在論者と非グローバリストの対立は、グローバリゼーション論争の「第二局面」と定位できる。この第二局面の対立軸は、「存在する／存在しない」(または「歴史的に新しい／新しくない」)である²⁾。しかし、両者は表面的な相違にも関わらず、ほぼもっぱら経済のグローバル化(貿易、海外直接投資、国際金融取引及び移民)を中心にグローバル化を論じているという点で共通している。そのため、彼らの議論は、「グローバル化→国民国家の衰退」「グローバル化→政治の終

焉」「グローバル化→文化の世界的均質化」といった一方向的な議論か、逆にグローバル化を否定しようとするあまり、それを完全に統合されたグローバル市場と同一視したうえで《神話》と見なす議論かのどちらかに陥りやすい。言うまでもなく、これらは極端かつ一面的で経済決定論的な議論である。したがって彼らはともに、グローバリゼーションを一次元的でリニアなプロセスないしは現象と見なす「グローバリゼーション次元論者」と一括しうる。

その三。グローバリゼーション次元論者と変容論者の間の対立は、グローバリゼーション論争の「第三局面」と定位できる。この第三局面の対立軸は、グローバリゼーションを「主に経済的な動き(市場の世界化)から一次元的に解釈するか／文化や社会などさまざまな領域から多次的に解釈するか」である。

II. 経済のグローバル化論がGSに貢献できていない理由とその脱却の方向性

さてGSを以上のように段階論的に把握すれば、第一の問題、すなわち「経済のグローバル化に関する論文が、GSの到達水準から見て不十分ないしは不適切なものが大半であり、学としてのGSに貢献しない」とは具体的にどのようなことなのか、という設問の答えが垣間見えてくる。その理由は第一に、第一局面と第二局面では「グローバル化≡経済のグローバル化」という暗黙の前提が共有されていたが、GSが第三局面に突入することで、この暗黙の前提の誤謬性が白日の下に晒されたからである。しかし第二に、それ以上に重要なこととして、GSが第三局面に突入することで、第一局面と第二局面におけるグローバル化概念が不適切であることが露になったからである。そこで、いったいどのように不適切であるのかを、第三局面における「文化帝国主義」をめぐる議論をトレースすることで、理解してみよう。

グローバリゼーション存在論者(特に反グローバリスト)は、グローバル化した資本のヘゲモニーによって、世界の文化が均質化してその多様性が損なわれる、と主張する(この主張はしばしば、「アングロサクソン型の経済制度が世界中に押し付けられている」という主張と対を成している)。

これに対して変容論者は、『画一的で均質なグローバル・カルチャーやアメリカ文化が、世界の文化的多様性を破壊している』という見解はあまりにも表面的で皮相な見方である」として、こうした議論を退けるのである。例えば、マクドナルドはしばしば文化帝国主義の象徴として扱われている。しかしマクドナルドで提供されている商品を調べてみると、実際には世界各国で様々なローカル性を付与されている——てりやきバーガー(日本)、マック・ロブスター(カナダ)、ターキー・バーガー(フランス)など、現地の食文化の伝統を取り入れた多様なメニューが開発され存在している——ことがわかる。つまりマクドナルドの世界的拡大＝グローバル化は、各国食文化の多様性を破壊するとは必ずしも言えず、むしろ普遍性に各国の特殊性・個性・ローカル性が付与される形で進行するのである。しかもこうしたローカル性の付与は、単に提供される商品に留まらず、店舗運営や客の店舗内での行動など多岐に渡っていることが知られている(示村[2000], Watson (ed.) [1997])。

また、何もアメリカの食文化だけがグローバル化しているわけではない。例えば寿司は今や世界中で食されているが、素材の種類・食べ方・店舗運営や経営に到るまで、各地で異なるローカル性を付与されている(例えば呉・合田[2001])。また「うどん」「おでん」も韓国に根付いているが(植民地支配の結果である)、これらは時を経て改変され別の料理と化している(魁生[2001])。このようにある食文化が他の地域へ伝播したときに、当該地域のローカル性が

付与される例は、無数に存在する。

さらに変容論者は、そもそも「アメリカ」文化なるものが確固としたものではないと指摘する。例えばアメリカ文化の象徴とされるハリウッド映画は、監督者・製作者・俳優はもちろんのこと、資本も脚本も多国籍化している。つまり世界がアメリカ化しているのではなく、アメリカが世界化しているというわけである。またアメリカ文化のみならず日本の文化(カラオケ・アニメ・トレンドドラマ・J-popなど)もアジアを中心に世界中で受け入れられていること(岩淵[2001])を忘れてはいけない、と主張する。

このように、世界の文化状況についての幾つかの例を検討するだけでも、「(アメリカ主導の)グローバル・カルチャーが世界を席卷し、各地のローカルな文化が破壊される」という主張は、確かにいささか偏った見方であると言わざるを得ない。もちろんすべてのローカル・カルチャーが生き残るわけではないが、固有の生活様式や文化的諸制度がグローバル化によって直ぐに消滅するわけではない。それどころか、マクドナルドのような一見すると食の均質化を促すように思われる文化が世界中でポピュラーになる過程で、近年の日本におけるセルフうどん店や牛丼店の流行などに見られるように、ファーストフードの原理が日本食文化に活用されて逆にローカル・カルチャーが活発化する傾向が見られるし、さらにこれらはいずれもファーストフードの本場であるアメリカへ「逆輸入」されてさえいる。つまりグローバル化は、当初誰も予想しなかったような多様な反応パターンを形成しさえするのである^③。

要するに文化帝国主義論は、グローバル化にともなう同質化・均質化のインパクトのみを強調し過ぎており、ある地域や国が外からの影響力をどのように現地化・内面化していくのかという過程には殆ど目を向けていない。しかし、

ある地域の影響力や文化が別の地域へ伝播したとしてもそれがそのまま保持されることはなく、伝播の過程で変容するのが通例である。これは、文化に普遍的な側面と個別的な側面があるからである。一方では普遍性(例：マクドナルド)が増大(世界的に広がる)しても、他方では個別性・特殊性(例：テリヤキバーガー)が顕在化する(創出される)のである。結局のところ、「グローバリゼーションをひとつの要素や方向性一元化したり、単一の因果関係に収斂させたりする議論は、グローバリゼーションを一面的にしか捉えていないのである」(河内[2002:234-235])。

したがってマグリューは、グローバリゼーションのこうした多元的で複合的な性質に注目して、そのダイナミクスを5つの諸傾向——1：普遍化と特殊化、2：同質化と差異化、3：統合化と分裂化、4：中心化と脱中心化、5：併存化と折衷化——として提示したのであった(McGrew [1992:74-75])。またピーターズはグローバル化を「ハイブリッド化」と概念化したし(Pieterse [1994])、ロバートソンはグローバル化を「普遍主義の個別化と個別主義の普遍化」「グローカリゼーション」(グローバルなローカル化)(いずれもRobertson [1992])と概念化したのであった。

ここにいたってわれわれは、第一局面と第二局面のグローバル化概念が不適切であることを適切に理解できるだろう。グローバル化とは極めて複合的かつ複雑で矛盾を孕んだ概念であるにも関わらず、次元論者たちはその多様な側面を無視し、ごく一部だけを取り出して概念化しているのである。またグローバル化が複合的なプロセスないしは現象なのであれば、当然、分析に際してもその複合性が見失われてはならない⁶⁾。にもかかわらず第一局面と第二局面の議論では、こうした複合性が見失われている。もちろん経済のグローバル化論は、第一局面ないしは第二局面に留まっているから、当然のこ

とながらグローバル化の複合性を捨象してしまっている。しかし本来、より詳細に問われなければならないのは、グローバル化の複合的な性質そのものであって、それを「経済」という一次元に矮小化したうえで「賛成／反対」「存在する／しない」という図式に回収して良い訳がない(とはいえ、これらの問いそのものが否定されるわけではない。問題はあくまでも、これらの問いが支配的になってしまう結果、グローバル化の複合的な性質の分析が疎かにされてしまうことにある)。つまり経済のグローバル化論が抱える問題とは、分析を経済に限るために文化や政治を適切に分析できないとか、あるいは経済という次元から文化や政治にアプローチするために頓珍漢な分析をしてしまうということだけでなく、それ以前の問題としてグローバル化の複合的な性質を見失ってしまっている以上、「経済」のグローバル化さえ的確に分析できていない可能性が高い、ということなのである⁷⁾。これが、第一の問題、すなわち「経済のグローバル化に関する論文が、GSの到達水準から見ても不十分なものは不適切なものが大半であり、学としてのGSに貢献しない」ことの意味なのである。

ではなぜ経済のグローバル化論は、第三局面に踏み込めないのか。その原因は第一に、グローバリゼーションを概念化する際のタイムスパンにあると思われる。第三局面において提示されたグローバル化の概念を敷衍すれば、グローバル化とは、ある(外来からの)影響力の伝播—選択—受容—抵抗—再解釈—再構成などの各位相によって構成されるプロセスである、と理解することができるだろう⁸⁾。ところがグローバリゼーション存在論者は、これらの位相のうち特定の位相しか見ていない。比較的短いタイムスパンでグローバル化を概念化しているために、グローバル化の過程の全貌、とりわけ再解釈や再構成といった位相が視野に入っていない

のである。

原因の第二は、グローバリゼーションを概念化する際の地域の問題である。グローバリゼーション一次元論者はいずれも、グローバル化を地域的に偏って概念化していることが極めて多い(一般的な傾向としては、グローバリストと非グローバリストが主に先進国を、また反グローバリストが主に途上国を念頭においていることが多い。これらの悪弊はしばしば、自らが暗黙裡に想定している結論に合致しているケース=説明対象地域を意図的に選択することで強化されている)。もちろん、グローバル化の現れ方は地球上のあらゆる場所で均一ではなく、地域や国によって大きく異なる。たとえば先進国と途上国では、国際金融市場から受ける圧力に大きな違いがある。しかし必要なのは、地域や国によって異なる現れ方をする矛盾した諸傾向の一部だけを取り出して、それを「グローバル化」として概念化するのではなく、矛盾した諸傾向そのものを一つの枠組で説明しようと試みることはなかろうか。

つまり経済のグローバル化論が第三局面に踏み込むためには、より長期の時間とより広い空間を一つの分析枠組のなかに取り込むという方向でグローバル化を分析しなければならない、ということになる。具体的には、変容論者が既に提示している幾つかの概念——「ハイブリッド化」「普遍主義の個別化」「グローカリゼーション」など——を手掛かりにして、経済的な制度の具体的な変容を論理的かつ体系的に説明することを志向していかなければならないだろう。こうした作業を通じて、経済のグローバル化をより精緻に分析することによってこそ、経済のグローバル化に関する議論は、(再び)GSに貢献することが可能になるだろう。つまり経済のグローバル化論の<第三局面化>が必要とされているのである。そしてRobertson and White [2003]のようなGSの論文集において、経済のグ

ローバル化についての論文がごく僅かしか収録されていない理由も、結局のところ、現時点ではこの<第三局面化>への対応がなされていないという点にあるのではなかろうか。

III. GSの方法論的ナショナリズムと隠蔽された断層線

ところで以上の類型化は、マグリュー自身が述べているとおり、(a)グローバル化は歴史的に新しいか否か、(b)グローバル化を単一の因果関係で一次的に説明するか多数の因果関係で多元的に説明するか、という2つの軸を設定することで成し遂げられている(McGrew [1997:10])。

もちろんこの類型化がある程度有効であることは間違いない。しかしそこには限界があるように思われる。単純に考えても、「この2つ以外に対立軸はありえないのか」「本来問われなければならない問いが見過ごされてしまっているのではないか」という疑問が湧いてくる。たとえば「一次的か、多次的か」という対立軸が設定されることによって、一次元の立場を取らない論者はみな変容論者として一括されてしまっているが、こうした類型化は果たして適切と言えるのだろうか。

実は変容論者は、グローバリゼーションを複合的なものと見なすがゆえに、その見解も極めて多様であって、実際には少なくとも2つの立場、すなわち変容論者Aと変容論者Bに分けられうると考えられる。ところが両者が共に「変容論者」として一括されているのである。しかもその際、変容論者Bが変容論者Aに限りなく吸収される形で「変容論者」と表象されるがゆえに、変容論者Bが本来有している理論的豊饒性が見えにくくなっている。その結果、何が起きるか。第一に、変容論者Aと変容論者Bとの間に存在している断層線(フォールトライン)が隠蔽されてしまう。第二に、その結果として、

GSとして本来問われなければならない＜問い＞が、見過ごされてしまいかねない。

そしてこの断層線こそが、マグリューやヘルドらの類型化からは見えてこない、GSの第四局面の対立軸なのである。逆に言えば、本来存在するはずの第四局面が、「変容論者」という括りによって隠蔽されているのである。となるとわれわれは、この第四局面を析出しなくてはならない。

では、なぜ第四局面は隠蔽されているのか。その理由を探るために、ここで注目したいのが、グローバル化をめぐる言説の多くが——とりわけ政治経済学的グローバリゼーション論が——、方法論的ナショナリズムに囚われているという事実である。もちろん非グローバリストが論じるように、国家自体が重要性を減じたとかその意味がなくなったとは必ずしも言えないし、変容論者が論じるように、国家は部分的には強化されてさえいる。しかしここで問題とすべきは、国家が重要なかどうかではなく、われわれにとって「ナショナル」という観念があまりにも強固でありそれが認識の奥底深くまで染み渡っているために、「ナショナル」以外に分析の準拠枠が追求されにくくなってしまっている、ということなのである。

その証拠に、政治学的なグローバル化論では、グローバル化によって「国家」は衰退するのか(第一局面)、それとも「国家」は健在なのか(第二局面)、あるいは「国家」は変容するのか(第三局面)、という問題編制となっている。国際関係論においては、国際社会において「国家」はもはや唯一の重要なアクターではなくなり多様な権威主体や多国籍企業、NGOなどが重要になるのか(第一局面)、それとも引き続き国際社会を左右するのは「国家」なのか(第二局面)、あるいは「国家」と多様な権威主体・多国籍企業・NGOなどが相乱れる形でグローバルガバナンスを構成していくのか(第三局面)、という

問題編制となっている。同様に、経済のグローバル化論では、「国民」経済は資本のグローバル化によって自律性を失い、無力化させられ、アングロサクソンモデルへの同質化を迫られるのか(第一局面)、それとも各国「国民」経済の制度的多様性は引き続き維持され、自律性も保たれるのか(第二局面)、あるいは各国「国民」経済の内部におけるさまざまな制度が、例えば「グローカリゼーション」のような形で変容するのか(第三局面)、という問題編制となっている。

だがしかし、こうした枠組からは——仮にこれらの問いがどれほど精緻に突き詰められたとしても——、《新たな社会的空間の創出・編成・変容過程を捉える》という問題編制は出現しないだろう(Brenner [1999])。つまり本来はGSこそが、率先して社会科学の方法論的ナショナリズムから脱しなければならないのに(伊豫谷[2002])、GSを構成する多くの議論もまた方法論的ナショナリズムに囚われており、それゆえに「国家」という準拠枠から脱しきれておらず、結果として「空間」という問題編制を等閑視してしまっているのである。つまりGSにおいては、「国家」の変容や「国民」経済の変容だけではなく(もちろんこれらが問われる必要がないわけではない)、新たな社会的空間の創出・編成・変容過程についても、より重点的に分析がなされるべきなのである。

こうして、変容論者Aと変容論者Bの違いが垣間見えてくる。第二局面までの議論は、市場(グローバリゼーション存在論者)対国家(非グローバリスト)、あるいは収斂convergence(グローバリゼーション存在論者)対分岐divergence(非グローバリスト)という二項対立構造によって規定されていた。これを受けて第三局面では、変容論者(正確には「変容論者A」)が、グローバリゼーションを例えば「ハイブリッド化」「普遍主義の個別化」「グローカリゼーション」な

どと概念化することによって、両者の相克を試みてきた。そして政治経済学的グローバリゼーション論、とりわけ政治学と国際関係論においては、これを受けて国家の具体的な変容が問われ始めている(註5参照)。しかし変容論者Aはある意味では折衷主義者でしかなく、所詮は「国家」に囚われるあまり「空間」という問題編制を省みてこなかった。

これに対して変容論者Bは、方法論的ナショナリズムに囚われることなく(各論者にその自覚があったかどうかは定かではないが)、「空間」という問題編制に取り組んできたように思われる。われわれはその論者として例えばHarvey [1989=1999]、Giddens [1990=1993]、Bauman [2000=2001]などを思い出すことができるだろう。そしてこれらの論者に共通しているのは、「空間」をそれ自体としてではなく、「時間」概念との関係で問うているという点である⁽⁴⁾。かくして時間-空間の変容という問題編制が浮上してくることになる(高橋[2002])。この変容論者Bによる時間-空間の変容については、GSにおいては未だ十分には注意が払われていないが、この方向で議論を突き詰めていくことによってこそ、変容論者Bが提起する<問い>が浮かび上がってくるのである。

IV. グローバル化の見過ごされた<問い> ——リスク、不確実性、不安

まず「時間」と「空間」の関係についての検討から議論を始めよう。ギデンズによれば、モダニティの原動力の一つは、《時間と空間の分離》であるという。近代以前には、時間は常に空間と結びつけられていたが、機械時計の発明とその普及によって、時間は空間から分離されるようになった(Giddens [1990:16-17=1993:30-31])。つまり近代とともに「時間の空間からの解放」(Bauman [2000:112=2001:147]) が図られたのである。

こうして「時間と空間が分離し、両者が標準化された『空白な』次元を形づくっていくことで、社会活動は、目の前の特定の脈絡への『埋め込み』から解き放たれていく。特定の脈絡からの脱埋め込みをとげた制度は、時間-空間の拡大の範囲を大幅に押しひろげ、その結果、時間と空間を超えた調整に依存していく」(Giddens [1990:20=1993:34])。だからこそ、《時間と空間の分離》を原動力の一つとする「モダニティは、本来的にグローバル化していく」(Giddens [1990:63=1993:84])のである。そしてギデンズは、この近代における時間と空間の変容を、「時空間の拡大化」と概念化している。「近代においては、時空間の拡大化の度合は、それ以前のいずれの時代と比べてもはるかに激しくなっており、したがって、特定地域の社会形態や出来事と、遠隔の地域の社会形態や出来事との相互の結びつきは、それに応じて『拡張』していくようになる。グローバル化とは、さまざまな社会的状況や地域間の結びつきの様式が、地球全体に網の目状に張りめぐらされるほどに拡張していく過程を、基本的に指している」(Giddens [1990:64=1993:85])。

なるほど確かに昨今、グローバル化として表象されるインターネットによる遠隔地との瞬時的コミュニケーションは、時間から分離された空白な空間が、ローカルな文脈から脱埋め込みをとげた上で、新たな地球規模の社会的空間として再埋め込みされていくプロセスと言えなくもない。そしてこの点において、《空間》は拡大しているのかもしれない。

しかし我々が今日体験しているのは、かつて船によって多大な日数を要した外国への旅行がジェット機によって数時間で可能になったり、あるいは地球上から未開の地が消滅したことなどに象徴的に現れているように、むしろ(物理的な意味ではなく、社会的な意味での)《空間の縮小》ではないだろうか。あるいは我々が今

日、目の当たりにしているのは、むしろ《時間の短縮》ではなからうか。

このような疑問に対して適切な答えを与えてくれるように思われるのが、「時空間の拡大化」とはある意味で正反対の「時空間の圧縮time-space compression」という概念を提示したハーヴェイである(Harvey [1989=1999])。時空間の圧縮とは何か。この概念はよく、「航空網の発達により世界中どこでも2日以内に到着できる」というようなこととして理解されているが、こうした解釈は適切とはいえない。ハーヴェイによれば時空間の圧縮とは、まずもって「回転時間の加速化」であり、より具体的には資本主義経済における生産・流通・消費過程におけるスピード・アップである(Harvey [1989:284=1999:365])。

しかし、ここで我々にとってより重要であり、見過ごされてはならないことは、単に回転時間が加速化して速度が上昇した結果、(所要)時間が短縮されることだけではなく、むしろ時間が圧縮される結果として必然的に生じる以下の変化である。

第一に、速度の上昇による(所要)時間の圧縮が、たとえば電子ネットワークによって、極限まで突き詰められていくことで、未来が限りなく現在化され、「リアルタイム」「瞬間」「即時」という概念が一般化し、これらに高い価値が付与されるようになることである。バウマンは以下のように述べる。「『短期』が『長期』にとってかわり、瞬間性が究極の理想となった」(Bauman [2000:125=2001:163])。

ところがこうして「即時」が究極の理想となるとき、興味深いことに以下のような事態が生じてくる。すなわち、電子ネットワークに頼らずとも「即時」を物理的に可能にしてくれる局地的な場所性の価値が、異常なまでに肥大してくるのである(Harvey [1989:294-296=1999:378-381])。その象徴的な例が、世界都市(そのなか

でもとりわけ中央ビジネス街区(CBD))やシリコンバレーであるが、今日よく知られているとおり、これらの地区ではいずれも、「局地的な場所性」という固有の価値を背景にして、高度な経営判断が素早いスピードで、しかもしばしば過去の意思決定を無視する形で(朝令暮改的に)展開されているのである(Sassen [1991],Saxenian [1994])。

第二に、「即時」が価値を高めていく趨勢とは逆に、蓄積的時間が価値を減じていくことである(Bauman [2000:125=2001:163])。たとえば今日、「労働」も回転時間を早めており、一つの会社に長期間勤めるという経験は、ますます希少化している。「今日のアメりカでは、カレッジに少なくとも2年間在学した若者は、一生を通じて少なくとも11回転職し、40年間に少なくとも3回はスキルベースを変える可能性がある」(Sennett [1998:22=1999:14])。こうして「キャリア」という概念が無意味化しつつあるが、ここで見逃せないのは、蓄積という時間的体験が価値を減じていくとき、一つの職場へのコミットメント＝組織への忠誠心という空間的体験もまた価値を減じていくという事実である(Sennett [1998:24-25=1999:17-18])。このことは、逆に空間的体験である安定した「景観」が、しばしば蓄積という時間的体験によって初めて獲得されるものであることから裏付けられる。したがって、時間の圧縮は、空間的な不安定性をも増していくという帰結を併せ持っていることになる。

第三に、未来が現在化され究極的には「即時」が理想となるがゆえに、逆説的にも未来はますます「遠い」ものとして意識されていくという事実である。その結果、将来的・予想的時間はいよいよ不確実性を増し、「未来」は先行き不透明なものとして受け止められ、長期にわたる展望が持たれにくくなるのである。実際こんにち、先進諸国が共通して経験している出生率の

低下は、子育てという長期にわたるプロジェクト(しかも結果を予想し得ない)がその見通しの不透明さゆえに放棄された結果でもあるが、これはひとりの人間が大人として一人前になるまでに要するおおよそ15年~20年という自然的な時間——この時間は圧縮されえない——が、圧縮された社会的な時間とのコンフリクトにまみれ、敗退していった結果なのである。

こうして蓄積的時間が価値を減じていくとき、かつてのように現在を規定したり左右したりしてきた「過去」の伝統や記憶は、現在を規定するものとしては意味を失っていく。かくして現在を規定するものは、「未来」へシフトせざるを得ない。ところが、将来的・予想的時間が不透明なものとなったことで、進歩という観念から現実味が失われ、かつてのように「未来」が信じられなくなっているのである。そもそも「未来」は、人間の過去の営為の歴史と、その解釈によってこそ展望されるものなのであるから、これはある意味で当然のことである。「過去」が不確かなものとなれば、「未来」もまた確固たるものにはならないのである。にもかかわらず、現在を規定するものとしての「未来」への感覚はむしろ鋭敏になったままである。おそらくそれゆえに、この矛盾を突くようにして、安定した進歩が保証された未来ではなく、不確実性に満ち溢れたリスクのある未来が、結果を予想しうる単線的な進歩への挑戦ではなく、結果を予想しえず複線的な可能性をもったリスクへの賭けが、現在を規定し左右するものとして重要になってくるのである。こうして、グローバル化の必然的帰結として、「リスク」という観念が台頭してくることになる(Beck [1986=1998])。このリスク社会では、われわれは、進歩という確固たる(と思われていた)ゴールではなく、行き先のわからない未知への時間旅行を強いられるのである。今日、広く人口に膾炙した「なにもしないことが最大のリスクである」という言

説は、こうした時間-空間の変容を象徴するものとして示唆的である。ところが、リスクを取らないことがリスクであるという認識が広く行き渡るようになると、人によってはリスクテイキングが強迫観念と化してくるがゆえに、「長期的視野よりも目先の環境に釘づけになる」(Sennett [1998:90=1999:120])のである。つまりリスクという観念が一般化することそれ自体によって、将来的・予想的時間がますます不透明なものとして実感されるようになりかねないのである。それゆえ時空間の圧縮とリスクの増大は、自己強化的な共犯関係に陥っていく。

こうして時空間の圧縮によって時間的不安定性と空間的不安定性の双方が増大する結果、人間の思考や感覚においては、「リスク」「不確実性」「不安」といった意識/観念が大きなウェイトを占めるようにならざるを得ない。セネットは次のように述べる。「今日の不確実性が特異なのは、歴史的な災厄が迫っているわけではないのに、それが確かに存在していることである。それは過酷な資本主義の日常的な慣行に織り込まれている。不安定が常態でなければならず、シュンペーター的企業家が理想の『普通人』として提示される。人間性の腐食は、おそらく不可避の帰結であろう」(Sennett [1998:31=1999:28])。

もちろんリスク、不確実性、不安という意識/観念が思考や感覚において大きなウェイトを占めるようになると、当然のことながら、人間は「移り変わる世界の中で、より安定した精神的拠り所とより永続的な価値観」を求めようになるだろう。具体的には第一に、時間的反動として、「歴史的なルーツが求められる」ようになり、第二に、空間的反動として、「ナショナリズムとローカリズム」への要求が高まる(Harvey [1989:292=1999:375])。

しかしここで注目したいのは、以下のような事実である。すなわち、極めて興味深いことで

あるが、人知によって時空間を征服しようとするばするほど、むしろ逆に、我々は「コントロール不能な時間」や「コントロール不能な空間」と向き合わざるを得なくなる、という逆説である。実際、「即時」は技術的には(携帯)電話、FAX、PC、E-mailなどによって担保されているが、こうした即時性が一般化すればするほど、われわれはどこにいても——たとえバカンスで海外にいても——、またどんなときであっても——たとえ寝室にいても——、他者からの要求に応じざるを得なくなり、自らの時間と空間を奪われていくのである (Fraser [2001])。こうした逆説を前にするならば、時間的反動も空間的反動も、それ自体としてはリスク、不確実性、不安に苛まれる傾向を逆転させる決定的な手立てには、おそくならないのではないかと思われる。

V. まとめにかえて

さて、以上の議論をまとめておこう。変容論者Bは、方法論的ナショナリズムから逃れることにより、「空間」という問題に、より具体的には時間-空間の変容という問題編制に取り組むことができている。そしてわれわれは、この時間-空間の変容という問題編制を経由することによって、「リスク」「不確実性」「不安」という〈問い〉を浮かび上がらせることができた。これこそが、GSにおいて見過ごされてきた〈問い〉なのである。

なるほど確かに変容論者Bも、時間-空間の変容に焦点を当てているという点では、「変容論者」ではある。しかし変容論者Bは、変容論者Aとは大きく異なると言わねばならないだろう。なぜなら、変容論者Aの射程が、「可視化されやすいグローバル化」までであるのに対して、変容論者Bは、時間-空間の変容という問題編制から浮かび上がってくる「リスク」「不確実性」「不安」という「可視化されにくいグ

ローバル化」をも射程に入れることができるからである。つまり変容論者Aと変容論者Bとの間に存在していながら隠蔽されていた断層線(フォールトライン)とは、「可視化されにくいグローバル化を扱えるか否か」という対立軸だったのである。これがグローバリゼーション論争の「第四局面」の対立軸である。したがって、両者をもとに「変容論者」として一括してしまうことは、あまり適切とは思われない。

さていまや我々は、GSとして、時間-空間の変容の帰結として生じてくるリスク、不確実性、不安の増大が、グローバル・エコノミーに対していかなる帰結をもたらすのかを、明らかにしなければならない(つまり、経済のグローバル化論は、第三局面への対応と第四局面への対応という2つの課題に迫られているのである)。またそのうえで、われわれはいかにすれば、リスク、不確実性、不安の増大という趨勢を逆転させ、信頼、確実性、安心などを再び自らの手に取り戻していくことができるのか——これこそが本来あるべき「反グローバリゼーション運動」ではなかろうか——という点についても、問わなければならない⁹⁹。

これらの課題に対応するためには、おそらく、時間-空間の変容を、単に時空間の圧縮として見るのではなく、あるいはギデンズやハーヴェイの見解だけに依拠するのではなく、他の論者の見解も含めて、より総合的かつ根本的に検討する必要があるだろう。実際、虚心坦懐に見つめてみるならば、グローバル資本主義全盛のこんにち、時空間の圧縮も部分的には危機に瀕しており、新たな時間-空間の変容が生じているようにも思われる。したがって次稿は、この新たな位相を明らかにするという作業から始まることになるだろう。

註

1. 経済のグローバル化についての論文かどうかの判定は、幾分かは恣意的にならざるを得ないが、少なめに見て5本(イマニュエル・ウォーラーステイン2本、クリストファー・チェイス＝ダン1本、ジェフリー・サックス1本、ダニ・ロドリック1本)、多めに見ても8本(上記に加えヘイッキ・パトマーキ、サスキア・サッセン、ジャン・ネダービーン・ピーターズの各1本)しか収録されていない。
2. 当然、非グローバリストの主張に対しては反論も多い。例えばローズクランズの指摘 (Rosecrance [1999:261])を参照のこと。ハーストとトンプソンも、自らの主張が反論されうることを認めている。この点については、Hirst and Thompson [1996→1999:62-65]およびThompson [2000:98-102]を参照せよ。
3. アメリカからもたらされたハンバーガーが日本で受容された結果、これにローカル性が付与された「ライスバーガー」が誕生し、これはいまや、台湾など東アジア諸国でも食されている。この螺旋的なプロセスを理解するならば、ライスバーガーがやがてアメリカに上陸すると予想しうるだろう。
4. それゆえに本来は、グローバル化を政治・経済・社会等と切り分けて分業的に分析することは適切ではない。とはいえ領域を分離せずにその複合性を分析せよというのは、実際のところかなり困難な要求である(Tomlinson [1999:17])。したがって実際には、領域の分離というGSの現状を一足飛びに改めることは難しく、領域を限定したうえでその複雑性を見失わない方法を追求せざるを得ないだろう。
5. GSが主に2つの領域において展開されており、その一つが政治経済学的グローバリゼーション論であることは冒頭で言及したが、実はこのうち政治学や国際関係論におけるグローバル化論では、第三局面というGSの到達点を踏まえて、これまでの国家衰退論(第一局面)対国家健在論(第二局面)という不毛な対立を超え、グローバリゼーションによって国家や国際関係が具体的にどのように変容するのかを体系的かつ論理的に明らかにしようとする機運が高まっている(Cerny [1995], Evans [1997], Sassen [1996], Weiss [1998], 山田[2001]など)。ところが経済学におけるグローバル化論は、その殆どが依然として第三局面へ踏み込むことなく、第一局面や第二局面に留まっている。
6. グローバル化をこのような各位相から構成されるものとみなす考え方は、文化触変論の考え方からグローバル化にアプローチすることを提唱している平野の議論(平野[2000:58])を参考にしている。
7. あるいはさらにSoja [1989]、Urry [1995]なども重要な論者であろう。しかし彼らが展開している空間論の詳細な検討は、今後の課題としたい。
8. とりわけギデنزは、時間と空間をまとめて考えることの重要性を強調している。「もちろん、何らかの目的で、時間と空間を分離して扱わなければならないこともあるかもしれない。だが、時間—空間をまとめて考えた方が、より適切な場合が数多くある」(Giddens [1987:146=1998:201])。
9. こうした問い——リスク、不確実性、不安など——は、一見すると心理学的・社会的なテーマのように見えるかもしれない。しかし、例えばKnight [1921→1957]を思い起こせば、これらは実は優れて経済学的なテーマでもあることがわかるだろう。そしておそらくケインズもまた、一見すると心理学的に見えるこれらのテーマが、経済学にとって極めて重要な問いであることに気づいていた。彼が提示した「(長期)期待」「確信」「蓋然性」「群集心理」といった今日よく知られている概念の存在は、その証左だろう。経済学の根底には、リスクや不確実性というテーマが、伏流のように存在している。なおケインズの経済思想を研究する立場からリスク社会論についての批判的論考を展開した柴山は、リスクが「内省的な意識の産物」(柴山[2002:268])であることを指摘したうえで、「『リスク』という名の不安そのものからいかにして自由になるか、という問いは依然として待たれている」

(柴山[2002:270])と述べているが、付言すれば、じつは信頼、確実性、安心なども部分的には「内省的な意識の産物」なのである。したがってこれらは、例えば単なる社会保障の充実だけでは、再帰的近代の今日においては必ずしも保証されないと思われる。この点についても、今後、検討を要する。

文献

- Bauman, Zygmunt (2000) *Liquid Modernity*, Cambridge: Polity Press. =(2001) 森田典正(訳)『リキッド・モダニティ：液状化する社会』大月書店。
- Beck, Ulrich (1986) *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. =(1998) 東廉・伊藤美登里(訳)『危険社会：新しい近代への道』法政大学出版局。
- Brenner, Neil (1999) “Beyond state-centrism?: Space, Territoriality, and Geographical Scale in Globalization Studies,” *Theory and Society*, 28:39-78.
- Cerny, Philip G. (1995) “Globalization and the Changing Logic of Collective Action,” *International Organization*, 49(4):595-625.
- Evans, Peter (1997) “The Eclipse of the State?: Reflection on Stateness in an Era of Globalization,” *World Politics*, 50(1):62-87.
- Fraser, Jill Andresky (2001) *White-Collar Sweatshop: The Deterioration of Work and its Rewards in Corporate America*, New York: W. W. Norton & Company.
- Giddens, Anthony (1987) *Social Theory and Modern Sociology*, Cambridge: Polity Press. =(1998) 藤田弘夫(訳)『社会理論と現代社会学』青木書店。
- (1990) *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity Press. =(1993) 松尾精文・小幡正敏(訳)『近代とはいかなる時代か? : モダニティの帰結』而立書房。
- 原田太津男 (2001) 「グローバリゼーション論争の現在」『国際研究』17:111-131.
- Harvey, David (1989) *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*, Oxford: Basil Blackwell. =(1999) 吉原直樹(監訳)『ポストモダニティの条件』青木書店。
- Held, David et al. (1999) *Global Transformations: Politics, Economics and Culture*, Stanford: Stanford University Press.
- Held, David (ed.) (2000) *A Globalizing World?: Culture, Economics, Politics*, London: Routledge.
- 平野健一郎 (2000) 『国際文化論』東京大学出版会。
- Hirst, Paul and Grahame Thompson (1996→1999) *Globalization in Question: The International Economy and the Possibilities of Governance*, Second edition, Cambridge: Polity Press.
- 岩淵功一 (2001) 『トランスナショナル・ジャパン：アジアをつなぐポピュラー文化』岩波書店。
- 伊豫谷登士翁 (2002) 『グローバリゼーションとは何か：液状化する世界を読み解く』平凡社。
- (他) (1999) 「グローバリゼーションとジェンダー」『現代思想』27(12):58-90.
- 魁生由美子 (2001) 「グローバリゼーションの背後には“世界支配”」『瀬戸内短期大学紀要』32:43-50.
- 河内信幸 (2002) 「グローバリゼーションと『文化帝国主義』」『国際研究』18:213-249.
- Knight, Frank H. (1921→1957) *Risk, Uncertainty and Profit*, New York: Kelley & Millman.
- McGrew, Anthony G. (1992) “A Global Society?,” in Stuart Hall, David Held and Tony McGrew (eds.), *Modernity and its Futures*, Cambridge: Polity Press, 62-102.
- (1997) “Globalization and Territorial Democracy: An Introduction,” in Anthony McGrew (ed.), *The Transformation of*

- Democracy?: Globalization and Territorial Democracy*, Cambridge: Polity Press.
- (1998) “The Globalisation Debate: Putting the Advanced Capitalist State in its Place,” *Global Society*, 12(3):299-321.
- 呉偉明・合田美穂 (2001) 「シンガポールにおける寿司の受容：寿司のグローバリゼーションとローカライゼーションをめぐる」『東南アジア研究』 39(2):258-274.
- Pieterse, Jan Nederveen (1994) “Globalisation as Hybridisation,” *International Sociology*, 9(2):161-184.
- Robertson, Roland (1992) *Globalization: Social Theory and Global Culture*, London: Sage.
- Robertson, Roland and Kathleen E. White (eds.) (2003) *Globalization: Critical Concepts in Sociology*, 6vols, London: Routledge.
- Rosecrance, Richard (1999) *The Rise of the Virtual State: Wealth and Power in the Coming Century*, New York: Basic Books.
- Sassen, Saskia (1991) *The Global City: New York, London, Tokyo*, Princeton: Princeton University Press.
- (1996) *Losing Control?: Sovereignty in an Age of Globalization*, New York: Columbia University Press.
- Saxenian, AnnaLee (1994) *Regional Advantage: Culture and Competition in Silicon Valley and Route 128*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Sennett, Richard (1998) *The Corrosion of Character: The Personal Consequences of Work in the New Capitalism*, New York: W. W. Norton & Company. = (1999) 斎藤秀正(訳)『それでも新資本主義についていくか：アメリカ型経営と個人の衝突』ダイヤモンド社.
- 柴山桂太 (2002) 「『豊かさ』の中の不確実性：『リスク社会』論の批判的検討」佐伯啓思・松原隆一郎(編)『新しい市場社会』の構想：信頼と公正の経済社会像』新世社, 233-273.
- 示村陽一 (2000) 「グローバル化はアメリカ化か？：文化のグローバル化の『普遍性』と『個別性』」『武蔵野女子大学文学部紀要』 2:31-39.
- Soja, Edward W. (1989) *Postmodern Geographies: The Reassertion of Space in Critical Social Theory*, London: Verso.
- 高橋良輔 (2002) 「グローバリゼーションと時間－空間変容についての一考察」『相関社会科学』 11:18-33.
- Thompson, Grahame (2000) “Economic Globalization ?,” in Held (ed.), 85-126.
- Tomlinson, John (1999) *Globalization and Culture*, Cambridge: Polity Press.
- Urry, John (1995) *Consuming Places*, London: Routledge.
- Watson, James L. (ed.) (1997) *Golden Arches East: McDonald's in East Asia*, Stanford: Stanford University Press.
- Weiss, Linda (1998) *The Myth of the Powerless State*, Ithaca: Cornell University Press.
- 山田敦 (2001) 『ネオ・テクノ・ナショナリズム：グローバル時代の技術と国際関係』有斐閣.

(受稿2003年6月27日/掲載決定2003年10月1日)